

V-10 石巻市釜谷地区釜谷集落 2012年12月18日(火)

報告者名	岡山 卓矢	被調査者生年	① 1925年(女)
調査者名	岡山 卓矢	被調査者属性	①釜谷住民(V-4話者①の母、V-6話者①)
補助調査者	土佐美菜実		

被調査者(主な聞き書きは話者①から)

*話者② 生年未確認(女)、話者①の息子の妻(V-4話者②、V-6話者②)

観音講について

元は個人宅で春秋に観音講をした。嫁に行った年から加入し、47歳で脱退する決まりである。契約講の脱退が55歳であるため、家によっては一時的に契約講にも観音講にも入っていない時期があることもあるが、これであるということは特にない。そもそも観音講に自発的に入らないという人もいるくらいである。

昭和40年すぎ頃に気仙沼の大島へ移動観音講をしたことがある。この時は上・中・下の観音講がそれぞれでんで移動先を決めていたが、平泉など遠出した際には三講が合わさっての移動観音講となったこともある。

観音講は、家から開放される楽しみがあり、嬉しい行事である。講員達が現代の価値で5千円くらいの金を出し合い、これを幹事が受けて、昼夜の飲み食いをする日である。元は誰かしらシイタケを作っていたのでこれと、こんにゃく・豆腐を買ってヒラやニなどの料理を作って食べた(ヒラやニについてはV-5参照のこと)。この料理は結婚式で出す料理で、早い話がその練習になるのである。魚店の東屋に料理を頼むように変わってからヒラ・ニを仕出しにしてもらい、停前が汁物と御飯だけ作った。なお東屋は息子が津波で流されたが、現在は石巻へ弁当を売りに母娘で通っている。

春秋の観音講で、観音寺敷地内の地藏院を拜む時は、浄土宗横川の寺の住職がきて祈祷する。観音寺住職とイトコの住職である。

また春の観音講では、山ノ神さんの石碑にシトギを供える。シトギは小麦粉だか団子粉だかを練って俵状に細長くし、にゅっと握って指跡をつけたもので、火は通さず、掌幅より少し大きい。これを盆の上に7個だか9個の奇数個載せ、酒とともに石碑前に供えるのである。

旦那寺

話者家は雄勝に旦那寺があり、釜谷に同様の家が7、8軒ある。比較的古い家が多く、本家ベッカがどちらもそうであるところもあるが、中には本家とベッカで寺が違うところもある。葬式の際は雄勝まで行かず、出張してきた住職が家で葬式の祈祷をしたあと、葬列が観音寺へ移り祈祷する。雄勝の住職が観音寺を借りての祈祷である。その後葬列は墓へ移動する。

長面の寺を旦那寺にする家ももっと多く、釜谷に2~30軒ある。転入してきた人や新しい分家などは観音寺の檀家になることが多い。契約講も、居つくなれば入れるが、そうでなければはじめから入らない。釜谷では戦争帰りの次三男達が随分ベッカになったが、仕事が無かったためすぐに石巻や仙台に出て行った。彼らもやはり契約講には入らなかった。ただし契約講に入っていないくとも、火事や人が亡くなったときは隣近所が手伝う。

お念仏について

長面・尾崎では念仏講があるが、中の観音講は講日に寺で念仏回しをする。節を口ずさんで念仏を唱え、長い数

珠を講員達が輪になって回す。数珠は観音寺が持っているものだが、1粒の大きい数珠が混じっていて、これが何周だかするのを数える。最年長者が務めることが多いが、誰かが輪の中心へ入って数珠が1周すると小太鼓をポンと打って合図にする。

葬儀について

葬式後に自宅でお膳をだしていたのが、拜んだあと釜谷の東屋を使うように、さらに石巻や飯野川の大きい会館で全て行うようにと移り変わった。話者らの家は大川小の隣だったから、よく見てた子供らの顔が忘れられない。隣人は尾崎の人だが、孫を2人亡くしており、その隣人の顔を見ただけで涙が出る。毎日釜谷の方を拜むことにしている。釜谷は70歳以上の人が5人しか残らなかった。自分は早く帰ってきた孫に連れられたから逃げられた。

カヤについて

カヤは夏から秋にかけ川の中洲から刈り取り、いい塩梅に切って乾かしたのを、農協か何かの団体に卸していた。刈り取りは男の仕事で、舟で取って来たカヤを担いで堤防まで上げる。女はこれを運ぶといった分担をする。長さを揃えて切ったカヤは、リヤカーで家へ運び、穂先近くを束ねて円錐型に広げて干す。乾燥させるのが終わる頃に次のカヤ刈がある。

上中下合同で、何日がカヤ刈りだよと決まりがあった。年に3回、盆前の日程だった。カヤ刈をしたのは車の無い頃だったが、昭和50年より前までくらいだろうか。

木炭のスミスゴ用に筒に編んだ覚えもある。人が3つ編む時に自分は1つしか出来ず不得意だった。編んだスミスゴもどこかへ出荷していた。どこへ売っていたのかは知らないが、カヤは海苔よりもスミスゴ用だったのでないか。

配達

昭和45、6年頃にバイク免許を取ったが、当時近隣にはあまりバイクに乗る人はいなかった。

実家について

父は村会議員で、衆議院議員や県会議員とも付き合いがあった。昭和50年近くなってようやく車を皆買うようになって、会社勤めを始めた。

結婚式について

以前は釜谷の武山何某の店であるタケトリが結婚式会場に使われた。タケトリは道路改修で用地買収されて仙台へ移った。あるいは舟で石巻や飯野川に行って式をする人もあったが、次第に石巻の式場へ車で行くのが普通になった。話者①の場合、飯野川の実家で結婚式の御膳をし、仲人と親類を合わせた4、5人で舟に乗って釜谷へ来て、また嫁ぎ先の家で結婚式のお膳をした。

話者①の縁談は3~4月頃に決まり、実家の養蚕が9月頃までかかるためその仕事を終えてから嫁いだ。こちらの家では姑さんが1人で養蚕を少ししており、嫁いだら話者①にもしてもらおうつもりだったそうだが、6月に急逝したので養蚕はしなかった。姑はいなかったが舅と小姑2人が同居していたため、やはり気をつかった。息子と嫁は昭和57年6月に石巻で式を挙げた。

契約講について

契約講の日待ちで銚子汲みがされているところは、停前にあたって年に夫が練習をしているのを見たり、準備時に道具を見てなど間接的にしか分からない。台の上に御屠蘇を入れた朱塗りの銚子を置き、水引のような尾っぽを付けていた。尾っぽの向きの上下で雄銚・雌銚と呼び分けていたようだ。契約講の座敷は女は覗いてはいけないとされ、実際「あれを早くだ！」など急かされるので忙しくて覗いている余裕も無い。契約講の日待ちの料理は祝儀用のサカゼン（酒膳）なのに対し、観音講の料理はブツゼン（仏膳）である。

本分家関係について

天明・天保の飢饉で当家と、その本家である A 家が食べ物に分け合って食いつないで以来、両家では盆の 15 日に餅とうどんを、16 日には入れ替わってうどんと餅を交換することを続けていた。ただし前にこれを簡略化して、ボンレイ（盆礼）の手土産代わりにハコイレ（箱入れ、既製品の箱入り菓子など）のやりとりに変えた。A 家は跡取りがなくて婿と嫁を同時にとって存続させた代がある。

雄勝への峠に当家を含む 4 軒で祀る氏神がある。旧暦 6 月の何日だけが祭日である。元は A 家および話者の家の 2 軒で祀ったのだが、A 家が釜谷へ移った際に氏神を持って来ず、また改姓して話者の家と違う姓になった。旧 A 家跡へ後に転入した X 家は、転入を機に旧 A 家が名乗っていた姓へ改姓した。これにより話者の姓と X 家は同姓となったが、親類関係はない。また X 家は、転入以来、A 家が置いていったその屋敷の氏神を祀るようになった。A 家と話者の家もまたこの氏神を祀り続けており、さらに X 家より分家した Y 家も加わった 4 軒によって、氏神祭りがされるようになったのである。また敷地内にあった熊野さんは話者宅だけで祀る氏神で、10 月 19 日に稲荷神社の祭り前に法印さんに来てもらってお祭りをする。御膳・野菜・餅などを供えて祈祷してもらうのである。この日は注連縄を熊野さんに張る。正月用を年末に買うときに一緒に買って置き、10 月まで取っておいたものである。ただし正月用で残った 1 つとなつては気分的に良くないので、レジを別にしてそれぞれに買うことにしている。なお正月は横に張る注連縄のほか、話者宅では短いゴボウ型の縦に飾るものも供える。縄に良い生地をスカートのように巻き、水引でくくってシデ紙を 2 種類挟んだものである。

またこれは話者の家だけかもしれないが、門松をカヤノキで作るのが他の家と違うところである。先祖が旅先で 1 晩過ごすのに助けられたためとの云われを聞いている。

震災後について

震災直後は入釜谷の姑友人宅へ世話になった。震災当日は修理工をする家へ人が集まった。事務所で夜まで過ごし、その後は座敷にいた。釜谷診療所の医者は津波で流されたが、看護婦が 3 人ここへ避難しに来ていた。2 日目は同じ入釜谷にある嫁の友人宅へ泊まった。3 日目に飯野川の河北総合センタービッグバンの避難所へ移り、そこで 4 か月ほど暮らした。釜谷から向かう堤防沿いの道は一部が崩れており、舟をこいでそこを越えたところ、飯野川からバスの迎えがあった。その年の 7 月にここの仮設へ移った。

集団移転は、釜谷のほか長面・尾崎・雄勝の一部の希望者達での移転となりそうで、10 軒以上 40 軒以下となりそうであるらしい。旧町で移転に差別があり、例えば旧石巻市民は現石巻市内であれば旧石巻市の範囲を超えて移転が認められているが、反対に旧他町の人は旧石巻の範囲への移転は認められないなど。釜谷の人が何人加わるか分からないが、この人数では大般若巡行はもう出来ないだろう。話者らの家は集団移転に加わらず、新たに家を建てようと思っている。当たり前になっていたことが無くなるのは悲しい。お正月様のお札は、貰っても飾る神棚もなく、粗末にしてしまうので今年から買わないことにした。

釜谷は、川に堤防が無くなり昔に戻ったようだと話す人もいる。時代が違えば自分たちはのたれ死んでいたらうし、無料で新しい仮設に入れているならしょうがないとも思う。舅には地震が来たら山か竹やぶに逃げろと言われていたが、まさか津波がくると思わなかった。震災後に話者②夫婦は自宅のあとに何かないか探したが、竹は流れても根っこはそのまま生えていた。それを持って帰ろうと、しゃがんで体を左右に振り、もっこもっこ引っ張ったが取れない。後ろで見ていた話者②の夫は何を取ろうとしていたか分からなかったようで、変な動きをするなど怒られた。だがこれは持って帰らねばと思い、何とか一部だけ千切り取った。そのうち、茶杓か耳かきかに加工してもらいたいと思っている。